

伝趙令穰筆《秋塘図》再考
——北宋リアリズムの観点から——

汪 文磊 (同志社大学大学院)

伝趙令穰筆《秋塘図》(一幅、重要文化財、北宋時代、絹本墨画淡彩、22.2×24.3 cm、大和文華館蔵)は中国北宋(960-1127)末期の絵画作例としてしばしば取り上げられる重要作品である。山岳が見当たらない水辺の景色を描いたもので、画面左奥から手前に広がる水流を挟む形で、左の汀には落葉した二本の樹木、右には霞を帯びた樹林を配す。また、よく見ると、手前には水鳥を、背後には朱色を含んだ空に鳥の群れを描く。

先行研究において、米沢嘉圃氏以降、本図は《秋塘図》と呼ばれるようになった。なぜなら、本図は、秋の夕暮れ時の、開封・洛陽近郊の水辺の景あるいは江南の自然を描いたものと見なされたからである。一方、様式論の観点から、北宋末期のものであり、趙令穰と伝わる絵画の中で、最も真跡に近いという点で意見が一致している。また、趙令穰は小景画の代表的な画家として位置づけられている。しかし、小景画そのものの概念が不明瞭であるため、北宋絵画史における位置づけも曖昧である。

そこで、本発表では、先行研究を踏まえ、モチーフをそれぞれ特定することによって、本図が具体的にいつ頃のどの地域の景観を描いたものであるかを明らかにする。その上で、趙令穰がいかにして本図を制作したかを探るとともに、北宋絵画史における趙令穰の位置づけを再検討することを目的とする。

そのために、第一章では、戸田禎佑編『花鳥画の世界』や中国科学院編『中国植物志』、趙欣如編『中国鳥類図鑑』に基づき、本図の主要モチーフは、アカツクシガモ、シダレヤナギ、コノテガシワ、コクマルガラスであることを示す。また、中国科学院編『動物学雑誌』に基づき、アカツクシガモは冬には岸で活動することが圧倒的に多いが、繁殖期の4月に近づくと水面で活発に泳ぐようになるという事実に着目する。さらに、蘇軾の「竹外の桃花、三两の枝、春江水暖かにして鴨先ず知る」といった詩文や、《慶陵壁画・春景》に見られるように、鴨が春を告げる鳥であることを示すことによって、本図は3月頃の春宵を描いた可能性を指摘する。第二章では、前述した『植物志』と『鳥類図鑑』に基づき、四つの主要モチーフが3月頃に共存する地域は、華中と江南に跨る地域であることを示す。第三章では、『宣和画譜』や『画継』に、趙令穰が「写す所はただ京城外の坡坂汀渚の景のみ」と記されていることと、『東京夢華録』に、清明節の半月前、皇族や親族が、それぞれ御陵や祖先の墓に詣でることが記されていることを示す。また、墓の周囲にはコノテガシワのような柏の木が植栽されてきたことから、趙令穰は本図を、手本や伝聞ではなく、清明節の頃実際に目にした、鄭州にある宋陵付近の景観に基づいて描いた可能性が高いことを指摘する。おわりに、以上のことを踏まえ、趙令穰は、観察に基づいて花鳥画を描くなど、リアリズムを重視する徽宗画院の伝統に連なる画人であると結論付ける。